

中国における民間芸能集団化の試み —舟山群島「東昇木偶劇団」を例として—

毛 久 燕

Abstract

In order to improve the development of economy, Mao Zedong began to implement the Great Leap Forward policy in 1958. Consequently, the Movement of Forming Rural People's Communes rapidly spread. It took the Collectivization of Agriculture as the main characteristics. The Collectivization of Agriculture not only promoted the appearance of many ownership collectivization organizations in the industry and commerce, but also impeded the folk performing arts organization, which took root in the civil activity, to try to develop the ownership Collectivization organizations. By studying the process of the collectivization in detail, we intend to figure out how the folk performing arts that are active in the private sector actually work.

キーワード……舟山群島 木偶劇団 集団化

I はじめに

中華人民共和国成立後の1950年代、中国の民間では、糸操り人形・棒遣い人形・指遣い人形などの木偶戯すなわち人形芝居が、まだ広く上演されており、北京・上海をはじめ、福建省・広東省・湖南省・陝西省・山西省などで、幅広く木偶戯上演会やコンクールなどが開催された¹⁾。さらに、ソ連やチェコなど東欧諸国を中心とする海外の人形劇団との交流活動も盛んに行われた²⁾。

しかし1958年、毛沢東の指示によって、農村で始まった大躍進運動は、次第に工業・商業などの領域まで浸透し、すべてに集団化が求められるようになった。木偶戯などの民間で活動していた芸能も集団化の道を目指すべきだという主張が起こった。

中国舟山群島の東昇木偶劇団は、このような状況の下に設立された。「東昇」とは、当時国歌のかわりに使われていた、共産党や毛沢東を称える歌「東方紅」の「東方紅、太陽昇」（東方が赤くなり、太陽が昇る）という歌詞から取った名称である。

東昇木偶劇団は大躍進時期（1958-60）の1959年に設立され、1966年の文化大革命（以下「文革」と略す）（1966-76）開始の時まで盛んに活動した。当時、木偶戯は「為政治、為生産、為工

農兵服務」(政治、生産、労働者・農民・兵士に奉仕する) という文芸方針に従い、共産党政治の宣伝をする現代劇を創作する一方、伝統的な演目については、伝統の中に新しいものを見出す「推陳出新」(古いものを批判的に継承し、新しいものを創造する) という文芸政策を実施するよう求められた。英雄を称える歴史劇のモチーフは、共産党政治宣伝の新たな意味を付されて上演された。例えば、『李剛打朝』という芝居では、西周王朝の李広は、厲王の馬王妃が女王になる野心を持つことを見抜いたが、馬王妃に讒言され厲王に殺される。李広の弟の李剛は馬王妃を殺して、復讐した。この物語は奴隷制を批判するものとして共産党に推奨されたが、ここでは李剛は人民の代表者、つまり共産党を表す者、馬王妃は封建制の代表者とされた。

文革中、木偶戲は封・資・修(封建主義・資本主義・修正主義)の代表であり、破四旧(旧思想・旧文化・旧風俗・旧習慣を捨てる)の対象として批判され、殆ど上演活動はできなかった³⁾。本籍地が農村にある木偶戲芸人は、本籍地に帰され、肉体労働に参加した。『舟山市誌』(1992)によれば、東昇木偶劇団は1966年7月に上演を停止し、1971年に解散した。

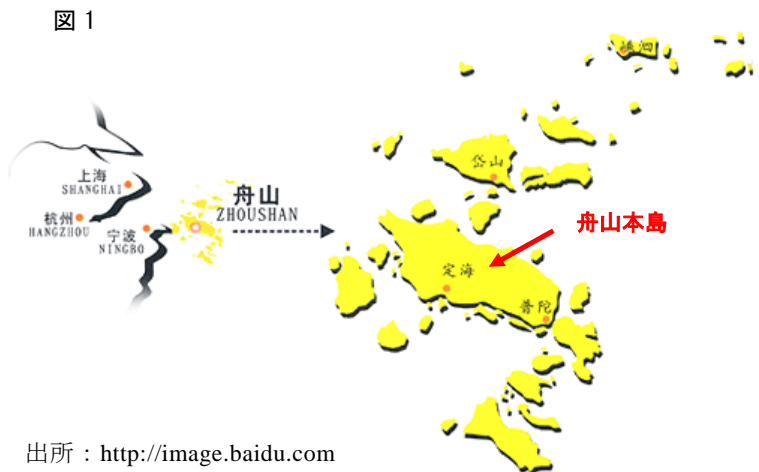
本稿では、民間芸能集団化の試みとしての東昇木偶劇団を取り上げて、主に舟山市群衆芸術館に所蔵される档案(保存書類)と筆者の聞き取り調査により、中国舟山群島の布袋木偶戲(指遣い人形芝居)がどのように個人経営から集団化へ転換したか、その過程を明らかにする。また、東昇木偶劇団の組織や政府との関係について考察する。さらに、それぞれの団員の経歴や特徴なども紹介する。

II 調査地の概要

1. 位置・地方行政など

中国浙江省舟山群島は東シナ海、長江の出口にあり、南西から北東に連なった大小 1390 の島嶼からなる群島である。海を隔てた西側は上海・杭州・寧波があり、総水域は 22000 km²、うち陸地面積 1440 km²。

2011 年の国勢調査によると、うち人が住んでいるのは 103 島、人口約 114 万。大きな島は主に西南に、小さい島は北東に集中している。一番大きな島は 502 km²の舟山本島で、中心地は定海である(図 1 参照)。



行政区画上では、舟山の島々は2区（定海・普陀）2県（岱山・嵎泗）に分かれる。舟山本島の中央部と西側を中心とした定海区は、その周りに金塘・冊子・長白・盤峙・長峙・大猫などの島があり、5鎮22郷30居民委員会が置かれて、区の役所は定海にある。普陀区は舟山本島の東部を占め、さらに六横・蝦峙・桃花・朱家尖などの島と周りの島の5区6鎮26郷から成る、区役所は沈家門にある。岱山県には岱山・衢山・長塗・秀山・大魚山などの島があり、5鎮13郷が置かれて、県の役所は岱山にある。嵎泗県は各島が小さくて、4鎮10郷が置かれ、県の役所は菜園にある。

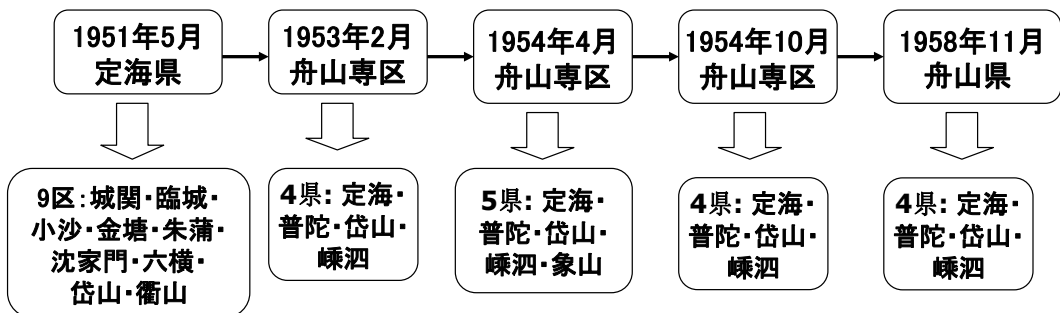
海に囲まれた舟山群島には漁港が多い、定海区のほかは、漁業が主産業である。昔から観音信仰が盛んで、特に漁の安全や豊漁を祈願して、普陀山に参る漁民が多い。

2. 1950—60年代舟山の行政区画

1950年5月、中国共産党政権が成立し、寧波専区に属していた舟山群島に、定海県が設置された。県の人民政府は城関に置かれた。1953年2月寧波専区から離れ、舟山専区となり、1958年11月舟山県に改められた。

その下に属す区（県）も時期によって変わる。図で表示すると、次のようになる。

図2



区（県）の下には100以上の鎮・郷が設置されていたが、1958年10月に大躍進運動が始まり、人民公社化がすすめられると、「政・社合一」⁴⁾の政策によって、鎮や郷の多くは合併したり増設されたりして、殆どが人民公社に再編された。

1960年10月、また舟山専区に戻して、全区は70公社となった。1967年3月からは、舟山地区に改められた。

3. 農業集団化と舟山の人民公社化運動

1949年中華人民共和国成立直後、新政府はソ連をモデルにして工業化を目指した。それを急

速に進めるため、農業では地主による封建的な土地私有制を否定する土地改革が行われ、農業が生み出す資金・原料・食糧をより効率的に国家に集中し、ソ連式の農業集団化のテンポを速めていった。

農業集団化とは、個人農を何らかの集団的経営に組織することである。中国の農業集団化は、1953年に制定された第1次5ヶ年計画によって、まず数戸から10数戸の農民が自由意志と互いの利益を前提に組織する互助組から始め、徐々に土地の出資と統一的な経営を特徴とする集団経済組織の初級農業生産合作社（農業生産協同組合）に組織し、67年ごろまでに協同組合の高次の形態である高級農業生産合作社に発展させる方針だった。

ところが55年以降、猛烈なスピードで集団化して初級を飛び越えた高級合作社化が進められ、56年末までに約9割の農民が組織され、初級と合わせると殆どが合作社に加入した。

1958年、幾つかの高級農業生産合作社を連合して人民公社ができた。その下に、生産大隊・生産隊を置く三級所有制を実施し、生産隊を基本的採算単位とした。そして、「政社合一」「五位一体」⁵⁾の制度によって、人民公社は農村最末端の行政単位として、政権の職能を行使するとともに、生産手段・資金・食糧はすべて共有なものになった。食事について、公共食堂を中心とする供給制によって絶対的な平等の実現を目指した。

小島によると、1958年10月末には全国74万余の合作社が合併して2万6千余の人民公社となり、全農家の99%以上にあたる1億2千余万戸が否応なしに加入した。平均して28.5の合作社が一公社となり、三つの郷に一公社、平均規模4千6百余戸であったが、所によっては一県一公社、2万戸以上という大規模なものもあったという。〔小島1986、226頁〕

舟山では1951年春互助組が組織されたのを皮切りに、54年1月初級農業生産合作社ができて、1956年1月にはすでに高級農業生産合作社も成立した。参加した農家は71686戸で、総農家数の98%以上を占めた。当時の舟山には公共食堂が2749ヶ所開かれ、「吃飯不要錢」（食事するのは金が要らない）といわれ、92571戸の392457人が無料で食べられるようになった。その結果、生産を破壊し、農民の利益が損なわれ、生産意欲が失われた。ついに、1960年11月から翌年6月にかけて幾つかの指示が出され、小面積の自留地（耕地の5-7%）を各戸に割当て、小規模な家庭副業と地方市場における個人取引を承認し、公共食堂を停止し、労働に応じた分配を重視するようになった。

Ⅲ 1950—1959年舟山布袋木偶戲の動き

1. 舟山布袋木偶戲とは

現在、舟山で演じられる人形芝居は、布袋木偶戲すなわち指遣いである。1840年のアヘン戦争前後に大陸から伝えられたと言われる。道具を扁担、即ち天秤棒で担いで移動したので、扁担戲とも呼ばれ、人形の操作、楽器の伴奏などすべて一人で行うものであった。今の舞台は高

さ 1.5m、幅 1mくらいで、人形を遣い唱う主演1人と、2、3 人の伴奏で上演するが、こういう形になったのは、1930 年ころのこととされている。

舟山の木偶戲は、廟⁶⁾（寺・社）や個人の家で上演され、次のように分類できる。

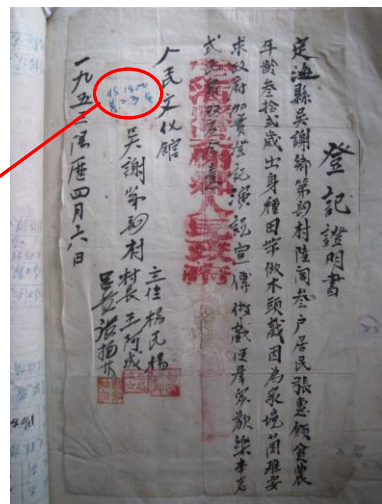
- ① 街戲：3、4 月の間、財神に感謝するため、及び7月 15 日午後施餓鬼の法会に合わせ、路上で上演する芝居。
- ② 廟戲：廟か寺の縁日に上演する芝居。
- ③ 謝洋戲：豊漁を神に感謝するため、海岸で上演する芝居。
- ④ 還願戲：願解きとして上演する芝居。
- ⑤ 紅戲：集団（村・宗族）の募金での上演する芝居。
- ⑥ 吉戲：花婿側で、結婚式前夜に神に奉納する芝居。
- ⑦ 好日戲：「好日」とは結婚式のことである。花婿側で式の後に上演する芝居。
- ⑧ 開面戲：嫁入り前の「開面」⁷⁾儀礼を行うときに花嫁側で上演する芝居。
- ⑨ 満月戲：嬰兒の満一ヶ月の祝に上演する芝居。
- ⑩ 寿戲：老人の誕生日に上演する芝居。
- ⑪ 祖堂戲：宗族の記念日に上演する芝居。
- ⑫ 上梁戲：棟上の時に上演する芝居。

2. 1952 年舟山木偶芸人登録

1949 年中華人民共和国が成立したが、舟山には当時、まだ十数万人の国民党軍が駐留していた。

1950 年 5 月 17 日、国民党は台湾に逃亡し、中国共産党の政權が舟山にも成立した。新政府は共産党の対立者を肅清するために、住民の身分・職業などの登録仕事を重視した。

1952 年、定海県の文化機関は初めて木偶戲を含むすべての舟山民間芸人の登録仕事を始めた。そして、芸人は県の文化機関へ登録に行くときは、本人が所属する郷政府が発行した、その人の階級や生活状況などを記した証明書が必要であった。ここで、木偶芸人の張惠願の証明書を具体例として以下に紹介する。



芸人張惠願所屬郷政府の証明書

図 3

出所：舟山市群衆芸術館（筆者撮影）

登記証明書

定海县吴樹乡第四村六閭三戸居民張惠願，貧民（农），年齡三十二岁，出身种田带做木头戏，因为家境困难要求政府加实（入）登记，演说（出）宣传做戏，使群众欢乐本□□民众双方会意。

人民文化館

吴樹乡第四村

主任：楊民楊

村长：王阿成

呂（閭）长：張抱来

一九五三年阳历四月六日

（訳）

登録証明書

定海県吳樹郷第四村六閭⁸⁾三戸の居民の張惠願、貧農、32歳、普段農業をしながら木偶戲をしている。生活が苦しいので、木偶戲を上演できるように登録を政府に求める。木偶戲の上演は地元民を開明し、楽しませるものである。この登録は地元民と芸人自身の双方が望むところである。

人民文化館

吳樹郷第四村

主任：楊民楊

村长：王阿成

閭長：張抱来

一九五三年陽曆四月六日

このような郷政府の証明書が6枚残っている。

この証明書は、1953年に書かれたものである。そこに書かれている「貧民」というのは土地改革で決められた階級区分の「貧農」の誤りである。張惠願という人は当時農業をしながら木偶戲を上演していた。即ち、農繁期のときは農業をして、農閑期になると木偶戲をするという暮らしであった。このような上演方式は半専業といい、ほかに、専業と業余があった。専業とは収入のすべてを木偶戲の上演から得るものである。業余とは主に音楽の伴奏者の場合で、上演頻度が低い。

木偶芸人はこのような証明書に基づいて、県の文化機関に登録し、登録表が作られると、会員証が交付され、会員番号も与えられた。写真の上左側に青い字で記入されている「収 1500、発 23号」は手続きの費用と会員証の番号である。1500元は、当時の普通労働者1ヶ月給料の六分の一に当たる（今の0.15元に当たる）。芸人登録表にはそれぞれに会員証の番号が付いているが、登録した芸人本人に会員証が交付されたかどうかは不明である。

芸人登録表は17枚残っている。そこでは名前・階級区分・性別・年齢・戸籍・住所・会員証番号・担当・職歴・上演場所などが記入されている。登録証には演目欄もあるが、演目欄はいずれも空欄になっており、芸人が何を上演するかということについて、この当時、政府はまだ注目していなかったことが分かる。

普陀区沈家門の木偶芸人、鄭明祥（1928年生まれ）によれば、この登録をしなければ、上演できなかったという。

3. 1956年舟山木偶芸人の再登録

1956年8月16日、浙江省文化局の指示による舟山の曲芸（演芸）⁹⁾と木偶芸人の全面調査が始まった。「定海県人民委員会進行曲芸芸人状況全面調査通知」〔档案1956〕によると、芸人の活動範囲が散らばっているため、調査結果の真実性を確保するために、調査表は各芸人がそれぞれ自ら記入するという方式で行った。調査表は17枚残っている。

調査表には、名前・年齢・芸能の種類・階級区分・住所・家族・経済状況などが記入されている。調査表は、ほぼA4の大きさをで用紙の半分ぐらいは演目欄で、そこには木偶芸人がよく上演する演目が記入されている。備考欄には、所有する人形の数・職歴・年間上演時間を記入している人も多い。

1956年12月23-27日、浙江省文化局の指示による民間芸人訓練班（芸人に対する思想教育）が定海県城関鎮で行われた。そして、当時舟山民間の曲芸人と木偶芸人を対象として、民間芸人を漏らさないように再登録工作も実施された。『舟山日報』（1956年12月16日）第3版¹⁰⁾

この記事を読むと、民間芸人訓練班は政府が木偶戯を利用して、民衆に政府の政策を宣伝しようとしたことが分かる。

そして、個人登録証（身分証明証）もつくられた。登録証は、携帯しやすいように厚みのある紙で造られていて、名前・性別・年齢・戸籍・劇の種類だけが記入されている。その登録証は13枚残っている¹¹⁾。

一般には、舞台を所有する木偶芸人は「班主」と呼ばれる。舟山木偶戯班では、遣い手が舞台を所有する場合が多い。遣い手は人形を遣いながら語り唱う主演であり、伴奏者は上演時に随時呼んでくるという形式が普通であった。

当時、舞台を所有する木偶芸人は、個人登録証のほかに、団体登録証も必要であった。その団体登録証は3枚残っている¹²⁾。団体登録証には団体の呼称や団長の名前・劇の種類などが記入されており、1年間の期限つきであった。団体の呼称は、これまでの「戯班」という呼称に変わって、「劇団」が使われている。これは、ソ連の呼称に倣ったものである。

1956年、舟山木偶戯のコンクールが定海県の城関鎮で行われた。その具体的な実施時期は不明であるが、その時、20木偶戯班、80名の木偶芸人が参加し、40演目が上演された。『舟山市誌・文化芸術』516-517頁] この記録から、当時の舟山では、少なくとも20木偶戯班、80名の木偶芸人がいたことが分かる。

4. 舟山木偶戲の集団化（1959年）

1958年大躍進運動の開始後、農業では互助組から、初級・高級農業生産合作社の段階を経て、人民公社化が進められ、生産・流通・分配まで全てが組織化・計画化され、土地利用や農業器具・機械も集団所有となった。集団化の動きは木偶戲などの民間芸能にも及んだ。

このような集団化の背景下、舟山木偶戲芸人にとっても、もともとの「単干」¹³⁾と言われる個人による上演は難しくなり、集団化の道に進んだ。

鄭明祥の話によると、1958年5月、定海の「潘渭漣木偶劇団」の潘渭漣、顧全林と普陀沈家門「友好木偶劇団」の鄭明祥・潘如明4人で「定沈聯合木偶劇団」を設立し、3ヶ月ほど沈家門で上演したという。このような劇団同士の提携で設立された劇団は、当時民間では「搭攤班子」と呼ばれた。舟山民間木偶戲班にも、全国的な劇団集団化に対応しようとした動きがあったことが分かる。

1958年8月、潘渭漣は人形遣い手の名人として政府の招きに応じて、沈家門を離れ、定海の「邵永園木偶劇団」の班主邵永園と連携し、新たに「潘渭漣木偶劇団」を結成した。この劇団は政府が関与した新しい劇団のモデルケースとして、舟山の各島・各町の工場、農村の豊作大会・豊漁大会、県の放送局、食堂などで上演することを求められた。しかし、これらの上演に対して、政府から経費を支払れることはなかった。なお、鄭明祥は、解放前に国民党軍、いわゆる「偽67軍」の王姓の人に二胡を教え、また一ヶ月ほど国民党軍の情報諜報活動に関与したという経歴を持つため、招かれず、この劇団には参加していない。

「整頓舟山県文化系統工作計画（草案）」によると、9月舟山政府は木偶戲の改革計画を立てた。ただし、その改革案はまだ「草案」の段階で、実際に実施されたかどうかは不明である。具体的な内容も分からない。

1958年11月、定海・岱山・普陀・嵎泗は合併して、舟山県となった。合併後の舟山県は行政・経済・文化などを全て一括管理した。当時、経済だけではなく、すべての領域で、集団化が目指された。集団に加わらないものは「単干」と呼ばれ、資本主義を実践するものとみなされた。「単干好比独木橋、走一步来揺一揺…人民公社是金橋、通向天堂路一條。」（単干はまるで丸木橋みたい、一歩歩くとゆらゆら揺れる…人民公社は金の橋、天国につながる道）という俗謡が当時流行った。

このような状況の下、民間木偶戲班も一層集団化が求められるようになった。それまでの個人的な上演形式は認められなくなって、政府より管理された組織にしなければならない。それは、幾つかの戲班が連携して、公的な規定などを備えたものである。

このような自覚の元に、1959年10月2日、木偶芸人の代表としての潘渭漣・沈林根は曲芸人の代表としての王文彪とともに、舟山の木偶戲と曲芸の改革会議を早く開催するように求める申請書を文教局に提出した。この申請書では、芸人の政治思想の遅れや、寧波などよそから来た芸人が舟山県文教局の許可を得ないで、舟山で上演している現状などを報告している。

1959 年末、潘渭漣が先頭に立って「東昇木偶劇団」が成立した〔『舟山市誌・文化芸術』1992、516 頁〕。

IV 東昇木偶劇団と曲芸・木偶協会

1959 年末に成立した東昇木偶劇団の最初の団員は 9 人であった〔档案 1958-1968〕。これは 1956 年のコンクールに参加した木偶芸人の八分の一でしかない。

東昇木偶劇団をもとに、1960 年 7 月舟山県木偶協会が設立され、主任、副主任、委員 3 人で構成される協会委員会ができた。主任は潘渭漣、副主任は沈林根、委員は邵永園である。同時に、走書・新聞などの様々な語り物を含む舟山県曲芸協会も設立され、この二つの協会は舟山県文教局より管理されることとなり、朝鮮義勇軍退役軍人の夏祖英が責任者として派遣された。

舟山県木偶協会と舟山県曲芸協会は 1961 年に合併し、舟山県曲芸・木偶協会となった。行政区画が県から専区になると（1963 年）、舟山専区曲芸・木偶工作者協会の名称に改められた。協会に加入しないと、正式に上演できないことになったので、協会には直属の東昇木偶劇団、舟山曲芸隊と白泉新聞隊の他に、民間で活動するそれぞれの業余を含む半専門の芸人も加わった。協会の会員になると、毎月会費の納入が必要で、会議と芸人訓練班にも参加しなければならなかった。

V 団員

東昇木偶劇団の最初の団員は 9 人であったが、団員数は時期によって変わる。特に 1961 年と 1962 年には、文教局の後継者育成計画によって、研修生を 3 人ずつ募集した。

東昇木偶劇団団員の一覧表は次の通りである。

表 1. 東昇団員一覧表（入団年、生年順）

名前	性別	生年 (年)	階級 区分	本籍	木偶戲 開始年齢	入団 (年)	担当	備考
葉頌昂	男	1898	貧農	定海塩河	28 才	1959	伴奏	1961 年退団、 1962 年没
顧全林	男	1905	貧農	定海城関	46 才	1959	伴奏	
潘如明	男	1909	貧農	普陀沈家門	15 才	1959	伴奏	
邵永園	男	1915	貧農	嵊泗	32 才	1959	伴奏	定海馬岙在 住、副団長、 1983 年没
沈林根	男	1916	貧農	定海洋巒	16 才	1959	伴奏	1961 年退団
陳小宝	男	1921	貧農	定海北蟬	38 才以前	1959	伴奏	1961 年退団

董阿旺	男	1930	貧農	定海洋魯	18才	1959	伴奏	1961年退団
潘渭漣	男	1934	貧農	定海城関	10才	1959	遣い手	団長
邵阿龍	男	1939	貧農	定海馬岙	幼いころから	1959	遣い手	邵永園の息子、1961年没
王志裕	男	1935	貧農	定海小沙	17才	1961	遣い手	
鄭明祥	男	1928	貧農	普陀沈家门	14才	1961	伴奏	
江秀琴	女	1946	学生 ¹⁴⁾	定海老硯	15才	1961	遣い手	研修生
張銀月	女	1946	学生	定海老硯	15才	1961	遣い手	研修生
張亜芬	女	1948	学生	定海老硯	13才	1961	遣い手	研修生
王如玉	女	1945	学生	定海城関	17才	1962	遣い手	研修生
朱愛蘭	女	1947	学生	定海城関	15才	1962	遣い手	研修生
潘定良	男	1947	学生	定海城関	15才	1962	遣い手	研修生、潘渭漣の弟、1985年没
王嗣慶	男	1938	雇農	定海小沙	12才	1964	伴奏	臨時雇用

出所：芸人登録票、「舟山県木偶戯芸人住所」（1959年12月13日）〔档案 1958—1968〕、「舟山曲芸木偶協会会員入会申請書」（1962年7月22日）〔档案 1962〕、「幹部簡明登記卡（登録カード）」（1964年）〔档案 1964〕、及び筆者の聞き取り調査により作成。

本表の担当欄では遣い手と伴奏に分けたが、これは東昇木偶劇団での担当を示す。実際には遣い手と伴奏の両方とも担当できる者が多い。

以下、各団員それぞれの経歴について、聞き取り調査などに基づき、具体的に述べる。

1. 葉顕昂

葉顕昂は2年の学歴で、1910年（12才）牧童になり、1912年（14才）から、農業に従事した。1926年（28才）、定海金塘の木偶芸人の邵会義に弟子入りし、1929年（31才）に個人戯班を立ち上げた。その時は人形50個を持っており、家族9人で木偶戯を主として暮らした。1950年（52才）、個人戯班を文化館に登録した。1959年（61才）、東昇木偶劇団に加入した。1961年退団して半専業木偶芸人になったが、翌年に亡くなった。

2. 顧全林

顧全林は、「地楽公公」という名前で知られる。1913年（8才）から父と兄に走書を習ったが、本格的に走書を語ったのは1945年（40才）からであった。1951年（46才）から木偶戯班の伴奏（胡琴）を始め、時々遣い手に替わって語り唱うのも行った、各地を巡回上演し、一年に約6ヶ月木偶戯をしていた。

3. 潘如明

潘如明は普陀沈家門の出身である。1917年（8才）ころから、父に走書を習った。1924年（15才）からは、当時、まだ舟山で盛んであった棒遣い人形芝居である長拷木偶戯¹⁵⁾をした。1948年（39才）から布袋木偶戯をした。1950年（41才）から弟子の鄭明祥が立ち上げた戯班の伴奏として活躍し、1958年（49才）、定沈聯合木偶劇団に加入した。

4. 邵永園

邵永園は1938年（23才）から走書を習い、1941年（26才）から正式の上演を始めた。1947年（32才）、定海小沙の半專業木偶芸人の馬小原戯班の伴奏を勤め、1952年（37才）からは定海小沙の半專業木偶芸人の王友發戯班の伴奏を勤めた。1955年に邵永園木偶劇団を立ち上げ、1958年に潘渭漣木偶劇団と連携した。

5. 沈林根

沈林根は1年の学歴で、1925年（9才）から農業を手伝った。木偶戯の修業を始めたのは、1932年（16才）であるが、木偶戯班を立ち上げたのは1944年（28才）である。その間、商売に従事したこともある。1950年（34才）、個人木偶劇団を文化館に登録し、各地で巡回上演をした。東昇木偶劇団に加入したあと1960年（44才）、舟山県木偶協会の副主任になった。

6. 陳小宝

陳小宝は家族3人で、もともと農業をしながら木偶戯をしていた。登録表には、一年に約2ヶ月上演していたと記している。

7. 董阿旺

董阿旺の経歴については、ただ1948年（18）から正式に上演したことしか分からない。

なお、葉頤昂・陳小宝・董阿旺の3人は、東昇木偶劇団の初期団員であるが、1961年に、そろって退団して半專業の木偶芸人となった。登録資料では退団の理由を「食糧困難」と書いている。当時、中国においては三年間に及ぶ経済困難の時期だった。東昇木偶劇団団員は專業木偶芸人であるので、生産隊の農業に参加できないため、食糧ももらえない。それで、農業を本職にし、木偶戯は半職業に変更することを希望した。

8. 潘渭漣

潘渭漣は祖父の代からの專業の木偶芸人である。潘如明の甥である。定海城関鎮の出身で、解放前は、父と家族6人、木偶戯を專業として暮らしていたが、父は目が見えなかったので伴

奏だけしていた。

1944年（10才）から、小学校に通いながら木偶戯を習った。1946年（12才）に学校をやめ、定海塩倉の朱三星に弟子入りした。1947年（13才）、專業木偶芸人として各地で巡回上演をした。1950年（16才）、独立して実家に帰り、父と潘渭漣木偶劇団を立ち上げ、文化館に登録した。50年以降のことは既に述べた（7-8頁参照）。

9. 邵阿龍

邵阿龍は邵永園の息子である。父の影響で木偶戯を自然に覚えたという。遣い手としては素晴らしかったが、語り唱えないので、いつも父が後ろで伴奏しながら語り唱っていたという。1961年に僅か22才で病没した。

10. 王志裕

王志裕は1952年（17才）小沙の陳宝金に弟子入りして、木偶戯の遣い手になったが、楽器はできなかった。父と弟の王嗣慶との三人で1953年から木偶戯班を立ち上げて巡回上演をした。1955年（20才）徴兵されて軍隊に入ったので、家族の木偶戯班はやめた。軍隊は1958年（23才）に退役した。

11. 鄭明祥

鄭明祥は上海に生まれたが、原籍は普陀の沈家門である。幼いころの病気で脚に障害が残った。1932年（4才）の上海事変で両親と沈家門に戻った。1941年（9才）のとき、父は事故でなくなって、母は再婚した。義理の父は專業木偶芸人であった。1942年（10才）鄭明祥は学校に通いながら父に胡琴を習った。1947年（15才）学校をやめて、定海白泉の木偶芸人の周章に弟子入りした。1948年（16才）には、正式に楽器を習うために、潘如明に弟子入りした。

鄭明祥の家には二つの木偶戯の舞台があり、解放前に專業木偶芸人として父と舟山の各地で巡回上演をした。1950年（18才）、個人戯班としての「友好木偶劇団」を文化館に登録した。50年以降のことは既に述べた（7-8頁参照）。

鄭明祥は1961年後半に東昇木偶劇団に加入したが、個人的経歴に問題があったため（7頁参照）、正式な団員としては認められていなかった。1959年1月24日から1962年1月23日まで3年間は「管制」されていた〔档案1964〕。管制というのは、収監されるわけではないが、移動の自由の制限や選挙権剥奪などがあった。当時の档案資料には、彼の名前が見えない。

12. 江秀琴・張銀月・張亜芬

1961年、文教局の指導による後継者育成計画が実施され、定海老嶼出身の江秀琴（16才）・張銀月（16才）・張亜芬（14才）が、女性研修生として入団した。この3人は全て農村戸籍で

あった。江秀琴は半專業木偶芸人の江友道の娘である。3人の入団は、人民公社と生産隊の紹介や文教局と協会の検討を経て認められたものである。師匠は潘渭漣である。

3人は試用期間としての3ヶ月間、熱心に練習したが、半年後には全員退団した。その理由は、鄭明祥によれば、当時文教局から農村戸籍の者は劇団の正式な団員になれないと指示があったそうである。当時、中国とソ連との両国関係は緊張関係になった。ソ連は中国での支援活動を停止するとともに、中国への借款の返還も要求した。そのため、農業の増産が必要となり、農村戸籍の者は都市戸籍に移動できなくなったからである。

13. 朱愛蘭・王如玉・潘定良

朱愛蘭・王如玉・潘定良の3人は1962東昇木偶劇団に加入した研修生である。師匠は3人も潘渭漣であった。

朱愛蘭は原籍が浙江省の温州であり、両親と共に舟山城閩鎮に移住してきた。両親は理髪業を営んでいたが、収入は1ヶ月30元ぐらいであった。朱愛蘭は長女であり、下にはまだ兄弟がいた、1961年中学に進学したが、半年20元の学費が払えないので、東昇木偶劇団の第2回目研修生に応募し、10人の応募者から選ばれた。

王如玉は朱愛蘭より1才年上で、学費が高いため、当時、既に中学をやめて商売をしていた。朱愛蘭から募集の情報を知り、一緒に応募して選ばれた。

潘定良は潘渭漣の弟である。幼いころから楽器を習っており、この年、兄の潘渭漣の紹介で研修生として入団した。

14. 王嗣慶

王嗣慶は3年の学歴で、1950年(12才)から走書をやっている父に楽器を習った。人形を遣うことは出来ない、戲班では伴奏をした。1958年、人民公社の文工団(文芸工作団体の略称)¹⁶⁾に参加し、団長となった。兄が軍隊に入った後、王嗣慶は半專業木偶芸人として他の木偶戲班で伴奏した。1964年以降、東昇木偶劇団の臨時伴奏もした。

東昇木偶劇団団員は、研修生以外はすべて男性である。学歴は皆ほぼ2-3年しかない。木偶戲という職業は、交通不便の時代には、舞台や夜具などを持って、海を渡って島々を巡演しなければならない大変な仕事であった。

潘渭漣・邵阿龍・潘定良・鄭明祥の4人は、代々人形遣いの家系で、家には舞台があった。親を手伝いながら舟山の島々を巡演した。その人たちは木偶戲を将来の職業とすることが大体決まっていた。しかし、舟山では木偶戲班を名乗るには親以外の師匠に付かなければならないという決まりがあった。鄭明祥の話によれば、解放前に遣い手として木偶戲をやるのに、親以外の師匠に付かず勝手に上演したら、道具などを取られてしまう。これは「抓同行」と呼ばれ

た。だから、鄭明祥と潘渭漣はそれぞれ定海白泉の木偶芸人の周章と定海塩倉の朱三星に弟子入りした。

潘如明・顧全林・王志裕・王嗣慶の4人は、親がすべて走書を職業とした人たちである。走書は木偶戲と同様に楽器の修業が必要である。人形を遣えなくても伴奏者として木偶戲班に加わることもできた。王嗣慶はその例である。

葉顕昂・沈林根・邵永園の3人は自らの希望で地元の木偶名人に弟子入りして、木偶戲を習った。但し、誰でも木偶芸人になれるわけではない。昔の木偶名人は弟子を選ぶときには、その生まれつきの才能を考慮した。例えば、演目や台詞を暗記する能力、声の質、指の敏捷性などである。一般には、師匠が弟子を取ったら、弟子はまず師匠の戲班を手伝いながら木偶戲を修業することが基本である。師匠は弟子が早く一人前になり、自分の仕事を分担してくれることを期待している。弟子が優秀な木偶芸人になって、独立すれば、師匠の評判も高くなる。

江秀琴・張銀月・張亜芬・朱愛蘭・王如玉は、文教局が募集した研修生である。その女性たちは、いずれも最後まで木偶戲を続けることができなかった。第1回目に採用された3人は都市戸籍を取るために東昇木偶劇団に加入した。1960年代の中国では農村戸籍を都市戸籍に変えるには、大学や短大に進学するか軍隊に入るという二つの選択肢しかなかった。軍隊に入るのは男性に限られるので、女性には進学の道しかなかった。それで、東昇木偶劇団に加入することは都市戸籍を取りたい女性たちにとっていいチャンスであった。集団所有制の東昇木偶劇団は文教局の下部組織であるので、政府機関の所属となる。しかし、米が貴重品であった当時、農村戸籍の人は人民公社からの食料配給権を持っていたが、劇団に加入すると、もともとの配給権がなくなる。臨時団員としての王嗣慶は食料配給権を確保するために、劇団に加入しなかったという。第1回目に採用された研修生のその後については既に述べた（13頁参照）。

第2回目に採用された女性の2人は、もともと中学生で、東昇木偶劇団入団の道を選んだのは、木偶戲への関心からではなく、学費が払えないために生活手段として加入した。

VI おわりに

本稿は档案の分析や現地での聞き取り調査を通じて、中国民間芸能の舟山布袋木偶戲がどのように個人経営から集団化へ転換したか、また集団化の試みとしての東昇木偶劇団について、その組織や団員の経歴などから明らかにした。

舟山布袋木偶戲は、1952年と1956年の2回の芸人登録を経て、1959年に民間芸能の集団化を目指した東昇木偶劇団が設立された。

1952年の芸人登録を見ると、登録証には演目欄もあるが、演目欄はいずれも空欄になっており、何を上演するのかということについては、この当時、政府がまだ注目していなかったことが分かる。民間では、木偶戲の上演は相変わらず、昔のままの姿で行われていた。新政府は「人」

つまりどんな芸人がいるのかを把握し、管理することを目的としており、芸人は登録なしに、勝手に上演することはできなかった。

1956年の芸人登録では、政府は芸人の思想教育や演目に注目し、木偶戯を政治思想の宣伝手段とした。しかし木偶戯班が実際に民間で行っていた活動方式や自由な上演形式については、そのままであった。政府は「戯」つまり上演内容の管理に重きを置いた。

次いで、1958年、全国で大躍進運動が展開され、農村の人民公社化が目指されるなど、集団化の風潮が政治から経済・文化などの各領域へ浸透すると、民間芸能もその影響を免れなかった。1959年に設立された東昇木偶劇団は集団所有制となり、当時政府が提唱した「走共同富裕的道路」（共同富裕の道を目指す）の標語のもとに、劇団収入の管理や上演場所・演目・後継者養成などはすべて政府が決めることになった。政府は「金」つまり経済管理に重点を置いて、集団の利益が最優位となった。

文教局や曲芸・木偶工作者協会に管理された東昇木偶劇団は、一見しっかりと組織されたようだが、実は様々な問題が隠されていた。例えば、特殊な政治背景で行われた芸人訓練班や劇団の新たな所得分配制度などである。これらについては、次稿で明らかにしたいと思う。

<注>

- 1) 丁言昭 1991 116-119 頁。
- 2) 同上。
- 3) 普陀区沈家門木偶芸人の鄭明祥によれば、文革中、革命模範劇の『紅灯記』しか上演したことがなかったという。
- 4) 農村における集団所有制の経済組織と末端の政権機関を一体化し、一つの社会組織とする制度。[『中国政経用語辞典』451 頁]
- 5) 工業・農業・商業・教育・軍事の五つの重点事業を組織して人民公社とする。[『人民公社制度の研究』59 頁]。
- 6) 日本での宮、社にあたるもの。
- 7) 女性の結婚印としての「開面」は中国で行っていた古い習慣である。絞られた二本の木綿を花嫁の顔の毛を剃って、前髪やもみあげ・眉を綺麗にする儀礼である。
- 8) 25 軒を単位とする組織。
- 9) 走書、新聞と呼ばれる語り物である。走書は、伴奏と語りの二人一組で伝統的な歴史物語などを語る芸能である。語り手は舞台を歩きながら、二胡の伴奏で語る。新聞も、伴奏と語りとの二人一組の演芸であるが、地元の事件や時事のニュースなどを語って、町を門付けして回る。語り手は目が見えない人が多い。
- 10) 記事の中国語全文：

定海县决定举办民间艺人训练班

定海县人民委员会根据省文化局指示，决定于本月 23 日至 27 日在城关镇举办民间艺人训练班，进行对曲艺艺人和木偶戏艺人的登记工作。

这是党和政府为促进民间艺术繁荣和发展的一项具体措施，也是关系到全县民间艺人前途的一件大事。人民政府将通过登记进一步加强曲艺、木偶艺术的领导和管理，切实保障艺人的合法权益提高演唱质量，使民间艺术更好地为社会主义服务。

(訳)

定海県で民間芸人訓練班の開催を決定

定海県人民委員会は省文化局の指示によって、本月 23 日から 27 日に城关鎮で民間芸人訓練班を行い、曲芸人と木偶芸人を対象として登録工作を実施する。

これは党と政府が民間芸術の繁栄・発展を進めるための具体的な対策の一つだけではなく、民間芸人の前途に関わる大事なことである。人民政府は今回の登録工作を通じて更に曲芸・木偶芸術の指導と管理を行い、芸人の法的な権利と利益を適切に保障し、上演水準を高めさせる。それは、民間芸術をよく社会主義の中国に奉仕させる。

- 11) 現在見られる芸人登録証は次の13人である。陳小宝・潘渭漣・侯惠義・邵永園・朱三星・方才根・馬小元・夏仁友・董阿旺・鄭惠明・姚大朝・鄭惠如・傅阿尚。
- 12) 三枚の団体登録証は定海県木偶芸人の朱三星の「鳳凰劇団」（定海県人民委員会発行）と江友道の「万年興木偶劇団」（定海県人民委員会発行）、普陀区張孝連の「大展木偶劇団」（普陀人民委員会発行）である。
- 13) 「単干」とは、一人でやる、というのが本来の意味で、集団化に対して個人で事業を行うものについて、最初は農業集団化について用いられたのが、次第に他の領域にも拡大した。
- 14) 階級区分には、家庭と本人の区別がある。家長が貧農であれば、一般に主婦と18歳以上の子供も貧農となり、未成年のものは「学生」となる。
- 15) 長拷木偶戲は棒使いの大型の木偶戲である。布袋木偶戲と同様に遣い手と伴奏で芝居を上演するが、人形が大きいので、遣い手は自分の役柄だけを演じ、10人以上必要である。伴奏の人数は布袋木偶戲と同じである。語りや遣い方・演目は、布袋木偶戲と通用するという。長拷木偶戲の舟山への伝来時期はよく分からないが、1920年ころまでは、布袋木偶戲より盛んであったと言われている。50年以降には、殆どなくなった。
- 16) 文工団とは、軍隊・工場・学校・機関や大衆団体などで組織され、演劇・舞踊・音楽などを通じて、政治や生産の問題をテーマに大衆への宣伝・啓蒙を行う文芸宣伝活動団体。〔『中国政経用語辞典』374頁〕

<参考文献>

著書

- 嶋倉民生など編 1980年『人民公社制度の研究』アジア経済研究所
- 小島晋治、丸山松幸 1986年『中国近現代史』岩波書店
- 愛知大学国際問題研究所 1990年『中国政経用語辞典』大修館書店
- 丁言昭 1991年『中国木偶史』学林出版社
- 舟山市地方誌編纂委員会 1992年『舟山市誌』浙江人民出版社
- 2000年『泰順木偶戲』泰順文史資料第四輯、内部発刊
- 宋連生 2002年『総路線・大躍進・人民公社化運動始末』雲南人民出版社
- 羅平漢 2002年『農村人民公社史』福建人民出版社
- 徐兆格 2005年『平陽木偶戲』平陽県文化新聞出版

論文

- 松野昭二 1963年「農村人民公社における『按勞分配』論」『アジア研究』9巻2・3号
- 中野泰 2011年「木偶戲とその非物質文化遺産化」科学研究費補助金研究成果報告書『中国江南山間地域の民俗文化とその変容』福田アジオ編

档案

- 舟山市群衆芸術館所蔵舟山曲芸木偶協會档案（1958—68年、1961年、1962年、1963年、1964年）（未公開）

主指導教員（橋谷英子教授）、副指導教員（池田哲夫教授・飯島康夫准教授）